

大豆の収量確保には土づくりと排水対策がポイント！！

1. 排水対策

- ◎排水対策は大豆作の**基本**です。
- ◎排水不良圃場では、砕土が不十分になりやすく、出芽率や除草剤の効果が低下しますので排水対策を実施しましょう。
- ◎サブソイラーは、密になった心土や下層土に縦に亀裂を入れることで、透水性・排水性を高めることができます（図1）。
※特に転換1年目の圃場は透水性が悪いので、ぜひ施工しましょう。
- ◎明渠は圃場の周囲に深さ30～40cmで掘り（図2）、排水路につなげます。
※特に隣の圃場が水稻の場合は高い効果が得られます。

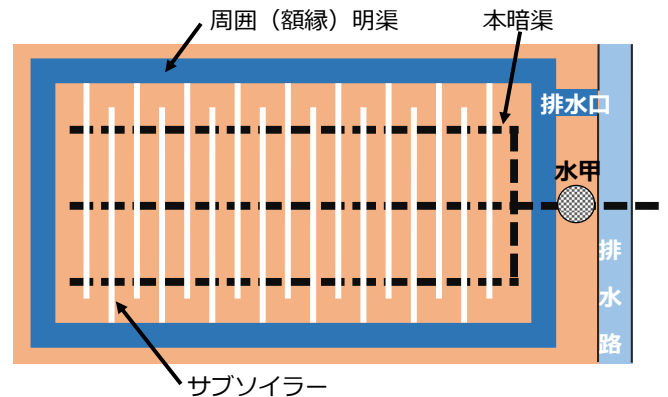


図1 圃場を上から見た図

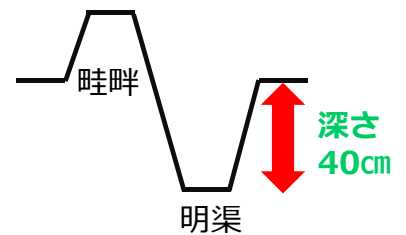


図2 圃場周囲の断面図

【排水対策のメリット】

- ・湿害を防止し、大豆の初期生育を助ける。
※播種から初生葉展開時期の湿害は収量にまで影響を及ぼします。
- ・根粒菌の着生が促進され、活性も高まる。
- ・降雨後、表面停滞水を速やかに排水できる。

2. 土づくり

- ◎大豆の生育、根粒菌活性の**最適 pH は、6.0～6.5**です。
pH が 5.5 より低い圃場は、石灰資材を投入し、pH を矯正しましょう。
- ◎連作圃場では地力が低下しています。堆肥や発酵鶏糞を施用して地力を補いましょう。

【施用の目安】

石灰資材（現物量）	炭カル：120kg/10a または 苦土石灰：100～120kg/10a
有機物（現物量）	完熟堆肥：1～2t/10a または 発酵鶏糞：75kg/10a
基肥施用量（現物量）	大豆高度化成 550：50 kg/10a (N成分 2.5 kg/10a)
	大豆専用一発 522：50 kg/10a (N成分 7.5 kg/10a)

3. 耕起

- ◎表面の土塊が細かいと出芽・初期生育の揃いが良くなり、除草剤の効きも良くなります。
碎土率（2cm以下の土塊率）**70%程度**を確保しましょう。
- ◎特に、田畑輪換圃場では、耕起を**2回**行い（全層の荒起こし+表層耕うんにより下層を粗く、表層を細かく仕上げる）、**碎土率を高める**ことが重要です。
- ◎ただし、耕起から播種までの間隔があきすぎると、土壤の乾燥や雑草が発生し、出芽率や除草剤の効果が安定しない場合があります。耕起後は速やかに播種作業が行えるよう作業計画を組みましょう。

4. 播種

- ◎播種適期は5月下旬～6月上旬、種子は**4～5 kg/10 a（目安）**用意し、種子消毒（紫斑病対策）を確実に行いましょう。
- ◎不耕起狭畦密植の場合は、20,000本/10aの栽植密度とし、種子量は**7～8kg/10a**を用意しましょう。
- ◎培土機の種類に合わせて、うね幅を設定しましょう。

歩行型培土機	うね間 90cm×株間 15～20cm×2本立て(11,000～15,000本/10a)
乗用型培土機	うね間 75cm×株間 16～20cm×2本立て(13,000～17,000本/10a)

5. 雑草防除

- ◎雑草防除は、①適期播種による生育量の確保、②除草剤の適期散布、③適期中耕培土が重要です。
- ◎土壌処理剤は、土壤表面に除草剤の薄い層をつくり、出芽してくる雑草を枯らします。
（深い層から出芽する雑草や種子が大きい雑草には効果が劣ります。）
- ◎土壤の碎土が悪かったり、土壤が乾燥し過ぎたりしていると、除草剤の層が出来にくく、除草効果が劣ることがあるため注意しましょう。

【除草剤をしっかりと効かせるためのポイント】

- ・ 碎土率を高める。
- ・ 適度な土壤水分を確保する。
- ・ 除草剤は播種直後、適期に散布する。

☆春の農作業事故防止啓発運動展開中（4月10日～6月10日）
あせらず、ゆとりを持って農作業をしましょう。周囲の方にも、声掛けを！